

ヘルン文庫とともに

中島淑恵

富山大学には旧制富山高等学校開学時に寄贈された小泉八雲旧蔵書（ヘルン文庫）があります。私はヘルン文庫で研究を行うときに、これを大学の宝として、優秀な研究者を富山の地に招き、人文諸学の研究を発展させたい…と願った南日恒太郎先生と馬場はる刀自の志を常に肝に銘じております。道はまだまだ遠いのですが、少しずつ少しずつ、両先達の期待にお応えできれば、と願っております。

さて、ヘルン文庫には、ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 小泉八雲、1850 年～1904 年）の旧蔵書、洋書 2,069 冊と和漢書 364 冊、及び『日本：一つの解明』（『神國日本』）の手書き原稿上下 2 冊 1,200 枚が収められております。洋書のうち 1,350 冊が英語で書かれた書物、719 冊がフランス語で書かれた書物です。このうちの 500 冊以上はハーンが来日するときにアメリカにおいてきた本で、ハーンの生前にはついぞ再び手にすることのかなわなかった本です。そのような本にはフランス語で書かれたものが多く、ニューオリンズ時代の文芸コラムには、これらの書物から着想を得たものがいろいろとあることが研究により分かってきました。もともと仏文出身の私がヘルン文庫の研究に着手したのはそのような理由からなのです。

ヘルン文庫の蔵書が貴重なのは、これらの書物がハーンという作家の作品世界を支えるバックボーンとなっているからでもあり、また、新聞記事や英文学や文学論などの講義のソースとなったためです。また、これらの書物は単なる印刷物の集積ではなく、ハーン自身が関心を持った箇所に書き込みを行っている、唯一無二の知的活動の集積なのです。

ハーンについて詳しく研究するうちに、この知的巨人を研究するためには、さまざまな分野の研究者と情報交換し、協力し合いながら研究しなければならないということに気づきました。かくしてヘルン研究会を結成し、学内の若手研究者を中心にヘルン研究を進める傍ら、国内外の専門研究者を招聘して、講演会や国際シンポジウムを開催してまいりました。おかげさまで少しずつ、ハーン研究の拠点として富山の地が国内外に知られるようになってきています。この研究のネットワークをさらに広げること、次の世代の若手に研究が継承されるような仕組みづくりをすることが私に課せられた使命だと考えております。

この度は、第 31 回翁久允賞という大変栄誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。この賞は、当然のことながら、私一人の働きによってではなく、ここまで私を導いてくださった当地の皆様、とりわけ八雲会の方々、富山大学で一緒に研究を進めてくださっている研究会の仲間、八雲を通じてつながりのできた松江をはじめとする様々な地域の皆様、ひいては世界の皆様に支えていただいて賞をいただけることになったものと考えております。これを励みに一層精進させていただきたいと思っております。ありがとうございました。